マリーとサイファー　～彼女が主人に目覚めたら～

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マリーとサイファー　～彼女が主人に目覚めたら～

【Ｎコード】
Ｎ２９６６Ｆ

【作者名】
ともみつ

【あらすじ】
ハーヴァイアンス家に使えるメイド、マリエッタ。いつも叱られてばかりだが、それでもめげずに働いているＭッ気のメイド。そして、多くの使用人を従えている当主のサイファーは、Ｓッ気が強く、使用人たちは恐れていた。しかし、誰一人として辞めることは無く、仕事を続けている。恐れているが、サイファーに恐怖は感じない。なぜなら、サイファーは子供だからだった。

プロローグ（前書き）

Ｓのサイファーとｍのマリエッタのドタバタメイドストーリーです。

今回はプロローグという形で、内容は少しだけです。

仲が良いのか悪いのか、二人を中心に展開するメイドのいる世界をどうぞお楽しみください！

プロローグ

「マリーッ！　どこだっ！　出て来いっ！」
ここは、ハーヴァイアンス家。門から邸宅までは一面の野原と花に囲まれ、のどかな鳥のさえずりと木漏れ日が穏やかな日常の乖離を幻想的に映し出す。その先にあるものは荘厳にして静寂に包まれた巨大な異質物であり、権力の象徴。七つの村と四つの町を統治下に置く伯爵家がハーヴァイアンス家。伯爵とは個人名ではなく、領地を治めることに対して与えられる位階であり、ハーヴァイアンス家の者は誰も伯爵を名乗りはしない。社交界にての示しとして背負い、交友に披露するものであり、現当主サイファーはまるで興味を示すことがなかった。
「マリーッ！　マリーはどこだっ？」
怒を含む声が回廊に響く。静寂の邸宅から響く声に鳥すらも飛び立つ。メイド、執事たちが廊下の中央部を空けて一礼したままにその背中を見送る。誰もが表情に恐れを覚えているが、サイファーはそれすら気にすることなく、呼ぶ。
「おい、マリーはどこにいる？」
「は、はい。マリエッタでしたら先ほど調理場へ向かうのを……」
「……っ」
メイドが言い終える前に舌打ちを残し、サイファーは調理場へ向かう。自身が攻められているわけではないのだが、言葉を遮られたメイドは、その舌打ちに身を震わせていた。
「また何か仕出かしたのかしら……？」
「今日も一段とお怒りだな、サイファー様は……」
「難しいお年頃だもんねぇ」
「お前ももう少しメイドとして自覚を持って働け。じゃなければ、ああなるぞ」
それでも空気はさほど険悪ではなかった。むしろサイファーに仕

える者達はそれを茶飯事のように、どこか見慣れて呆れたような、自愛のある眼差しでその背中を見送ってもいた。
それにはやはり、この理由があるからでもあった。
「ふんふふんふーん」
朝食が終わりわずかな休憩を挟んだ後に、調理場は再びの喧騒を取り戻す。昼食の用意は朝食とは比にならない。誰一人として無駄口を叩く暇なく、コック長を中心に誰もが駆け回っている。
「るんたったーるんたったーるんたったらたー」
その中で、ただ一人、鼻歌を歌う女がいる。調理服ではなく、執事服でもなく、メイド服ともまた違う、制服を纏ったメイドがマドレーヌの生地を作っている。しかし、コックたちからは何も言われず、女は楽しげに作業に没頭していた。
「マリエッタ、アフタヌーンティーならスティルルームメイドの仕事だろう？　お前がする必要はないだろう？」
見かねたのかコック長が覗き込む。スティルルームメイドとは、主にアフタヌーンティーにおいて重宝される茶や菓子全般を任される管理専門メイドであり、その違和感にコック長は声をかけたらしい。
「良いんですよ。サイファー様は、私の焼いたマドレーヌが好きなんですから」
品が良いというわけではなく、無邪気がしっくりくる笑顔で型へ流し込む。
「良いのか？　サイファー様お付がここにいても？　今の時間帯ならばサイファー様のお支度のお世話だろう？」
「サイファー様もお年頃ですから、人に見られたくないだろうと言う私なりの配慮です。私が誰よりもサイファー様のことをご理解しているのですから、どうぞお気になさらず」
笑顔だが、邪魔するなと言うような物言いに、コック長は肩をすかし仕事へ戻る。同時に調理場の扉が勢い良く開かれた。
「マリーッ！　ここにいるのかっ！？」

「ひゃうんっ！？」
背中から轟く大声に、マリエッタの体が跳ねた。調理中のコックたちも驚きに作業が止まった。
「あ、あら？　サイファー様？　い、いかがなされました？」
マリエッタが恐る恐る振り返ると、サイファーと視線が交わった。片方は信じられないと訴え、片方はここに嫌がったのかてめぇ、と威圧的な視線。一瞬にして静まり返る調理場に、サイファーの靴音がマリエッタへと響いていく。
「ど、どど、どうされましたか？　……あっ、サイファー様、ちゃんとお着替えはお済になられたんですねっ！　素敵ですっ！　お似合いですっ」
唐突なほめ殺し。だが、マリエッタの笑顔は引きつっている。それを見たコックたちは悟った。
「マリー……ここで何をしている？」
サイファーの声が先ほどの大声ではなく、冷静すぎる小声。表情には怒りの笑顔。
「サ、サイファー様のお好きなマドレーヌを焼いてみようかなぁ……なんて思ったり思わなかったりでしてぇ……えへっ」
流し入れた生地を見せるマリエッタは、必死な笑顔。一瞬それにサイファーは視線を落としたが、すぐに口の端を不適に持ち上げた。
「こい」
「あぁんっ、い、いひゃいれふぅってふぁっ」
マリエッタの体が前のめりに引っ張られる。サイファーは問答無用でマリエッタの片頬を掴み、マリエッタはトレーを持ったまま歩かされる。
「誰よりも分かってるんじゃなかったか？」
そんなマリエッタの姿に、コック長は苦笑していた。
「コック長」
「はい、どうされましたか？」
「気にするな。それよりも、これを頼む」

そっけない口ぶりで、サイファーはマリエッタからマドレーヌの載ったトレーをひったくるとコック長に差し出す。
「ふぁっ……」
摘まれ痛いのだろう。マリエッタは涙目だが、笑っていた。サイファーはマリエッタを見ることなく、コック長に渡すとそそくさと調理場を出て行く。
「ふぇふぇへ……」
マリエッタがトレーを持つコック長に振り返り、ピースサインをした。
「やれやれ。サイファー様も甘いんだかどうなんだかな……」
コック長がそんなマリエッタに頷きながらオーブンの方へと向かう。
「気持ちが悪い笑いをするな」
「ふぁ、ふぁい……」
振り払えば簡単に解くことの出来る体格差。サイファーは身の丈に合う高さにマリエッタの頬を引っ張っているが、マリエッタは歩きにくそうに上体を前に倒している。
「お前の仕事は調理場にはない。するべき仕事をきちんとしてからしたいことはしろ、良いな？」
「ふぁ、ふぁい……あっ……」
そこでサイファーが手を離した。マリエッタの体が元に戻ると、サイファーの頭頂部がマリエッタの胸辺りまでしかないことが明確に出る。サイファーはそのまま部屋のほうへと歩いていくが、マリエッタは少々戸惑い気味に首を傾げていた。
「あ、あのぉ、サイファー様？」
「何だ？　今日はガルファージの農工業の視察が入っている。時間がない。手短に言え」
サイファーは待つことも振り返ることもせず、ただ歩く。その脇には使用人たちが頭を下げ、通過するのを待つ。マリエッタだけがその中で浮かれているようにのほほんと追従する。

「もう終わり、ですか？」
頬をさすりながら聞く。見事に赤くなっている以上、サイファーは手加減なしに摘んでいたことだが、マリエッタはそれが不満と言うよりも、不自然に思えたようだ。
「時間が無いと言っているだろう。不満ならば、後に回すぞ」
「い、いえっ、それは遠慮しておきますっ。痛いんですからね」
首を振りつつも、苦情を訴える。メイドにはあってはならない言動だが、マリエッタはサイファーの隣を歩く。メイドには非常識なことだった。
「辞めたければ辞めればいい。ハウスキーパーのグレースに申告するぞ」
「あわわわっ、や、辞めて下さいよ？　グレースさんは怖い人なんですからぁ。もう、何度怒られたことだか覚えてないくらいなんですよぉ」
強気に見えて、サイファーのほうが圧倒的に扱いが上手。マリエッタは弱音を漏らす。
「お前の弱音を聞くのは俺の仕事じゃない。トリノ、マルクス」
「はい、お呼びでしょうか、サイファー様」
「ここにおります」
「はわっ、いつの間にっ？」
名前を呼んだ瞬間、外出仕事を主に担当するナースメイドのトリノと執事のマルクスがサイファーとマリエッタの後ろに現れる。
「支度は出来ているか？」
「はい。お車を回してあります」
「ガルファージへの手配も滞りなく」
「そうか。なら出るぞ」
「はい。お世話させていただきます」
マリエッタのことをまるで空気のように相手にすることなく、トリノとマルクスが早歩きのサイファーについていく。
「あっ、まっ、待ってくださいよぉ。私もお供しますぅ」

「必要ない。お前は仕事を怠っただろうが。たまった仕事を片付けろ」
マリエッタがこけそうになりながら、追いかけるが、サイファーがはじめて振り返り、冷たく言い放つ。
「ふぇ……？　そ、そんな……」
マリエッタの表情から唖然と笑顔が無くなる。いつもと何かが違うとサイファーを見るが、サイファーはそれを無視して玄関へ向かう。
「マリエッタ。今回は今後の農業契約の取り交わしがあるのです。あなたがいては収まるものも収まらなくなるのです」
トリノが涼しげな眼差しと忠告を残し、髪を靡かせ歩いていく。
「ガルファージは今年農業不作だ。サイファー様もその対応策で戸惑っている。あまり機嫌を損ねさせるな。成長に悪い」
マルクスはトリノとは異なり、比較的温厚な性格で、五回させないようマリエッタに事情を耳打ちした後、トリノに並び、靴音を残す。
「……」
マルクスの言葉を聞き、マリエッタは頬に手を寄せる。痛みは引いたが、その不自然さをようやく理解し、小さな背中をじっと見ていた。
しかし、マリエッタはそれを静かに見送るほど出来たメイドではなかった。
「わ、私もっ」
サイファーが過ぎ、顔を上げた使用人たちが立ち止まっていたマリエッタに視線を向け、トリノとマルクスも振り返る。サイファーは歩みを止めない。
「私ぃっ！　農家の娘なんですぅっ。だから、サイファー様なんかよりも農業には詳しいんですからねっ！」
明白は挑発的言葉。何を言い出すかと視線を向けていた使用人たちの表情から、一気に血の気が引く。主人に対し、そのような暴言

は言語道断。即刻謝罪したところで解雇は間違いないことだ。サイファーの足もそろった瞬間に止まった。
「……何だと、マリー？」
冷静な声色だったサイファーに、火がついたような怒りがサイファーを振り返らせる。
「ひぅっ！　……ほ、本当なんですからねっ！　こ、これでも、小麦、とうもろこし、じゃがいも、人参、トマトの栽培をお手伝いしていたんですからっ。何も知らないようなサイファー様になんか分からない目線で私は見ることが出来るんですよぉだっ」
一瞬鳥肌を立たせていたが、すぐに再びの強気発言に、サイファーの足が来た道をゆっくりと振り返る。それを見て、マリエッタが一瞬、笑みを浮かべた。
「マリー、誰に言っているのか分かっているのか？」
「マリエッタ。発言には気を払いなさい」
トリノもサイファーについて戻ってくる。表情は明白は嫌悪。マルクスも自信の忠告を無視しての発言に呆れているようで、ため息を吐いた。
「い、良いんですかぁ？　不作に対処する方法だって教わったことがあるんですからねっ」
近づいてくるサイファーに、マリエッタは恐怖に唇が震えていたが、どうしてもついて行きたいという欲に、必死にその場に経っていた。
「もう一度その口を叩いてみろ。縫い付けるぞ。それとも今すぐそうしてやろうか？」
「あひゃっ！？　いひゃいいひゃいれふっ」
多くの使用人が見ている中で、サイファーは片腕でマリエッタの頬を押さえ込む。唇がたてに八の字に変形する。メイドにあるまじき表情にほかの使用人たちが目を逸らす。サイファーの表情には不敵な笑顔。
「サイファー様、時間もありません。そのあたりにされた方がよろ

しいかと」
　見かねてマルクスが止めに入ると、舌打ちしながら乱暴にサイファーが腕を放す。
「ひゃうんっ」
「行くぞ、マルクス、トリノ」
　マリエッタの体が大きく揺れるがこけるまでは行かなかった。
「あなたも懲りないわね、本当に。呆れるわ」
　サイファーは先に歩き出し、マルクスが一瞬マリエッタを見た後についていき、トリノが理解に苦しむように言い放ち、二人の後追う。
「あうぅ、相変わらず容赦が無いですぅ」
　取り残されたマリエッタが頬を摩っていると、サイファーが歩みを止める。
「サイファー様？」
「いかがされましたか？」
　マルクスとトリノがサイファーを見る。
「……何を突っ立っている。早くしろ、マリー」
　その言葉にマルクスは振り返り、トリノとマリエッタはそれぞれ異なる意味合いだが、同じ驚きを見せた。
「は、はいっ！　すぐ参りますっ」
　歩き出すサイファー。それをすぐに追いかけてくるマリエッタ。
「……」
　トリノは不満げにマリエッタを見ている。
「やれやれ。サイファー様もまだまだ子供、と言う事ですか」
　しかし、マルクスは冷たいようで双ではないサイファーに自愛のある苦笑を双方に向けた。
「何だ、マルクス？　何がおかしい？」
「いえ、何でもございません。先を急ぎましょう、サイファー様」
「まっ、待って下さいぃ、サイファー様ぁっ」
　先を行く三人を追いかけるマリエッタ。今日もハーヴァイアンス

家はサイファーに脅えているようで、実は誰もがサイファーという当主のことを思い、守るために懸命に働いている。
「はわぁっ！？」
勢い欲何かがこける音がした。言わずもがなのマリエッタが恥じらいもなくおっぴろげにドレスを広げ、こけていた。
「どうして俺よりも大人のマリーの方が世話が焼けるんだ……」
その理由は、ただ一つ。ハーヴァイアンス家当主は、まだ十四の男の子だったのだ。
「全くです。マリエッタにはいま一つ自覚というものが足りておりません。ミス・グレースに再指導を頼むべきです」
トリノは、マイペースなマリエッタに対し、苛立ちがあるようだ。
「しかし、サイファー様のことを最もご理解されているのは、マリエッタだということは事実ですから」
「全く。マリーッ、もたもたするな。置いていかれたいのか？」
「はわわっ、お、置いていかないで下さいですよぉっ！」

プロローグ（後書き）

これからは、こういうテンションのストーリーでいければと思っています。
もう一つの新規連載と合わせて、展開させていきますが、更新は不定期になります。

一話．マリエッタ（前書き）

連絡をかねた更新です。

修理に出していたパソコンが戻ってきましたので、次回より更新を本格的に再開していきます。

一話．マリエッタ

出入り口へ続くレッドカーペットには、サイファーを見送る使用人が道を作り、一礼を交え、そこをサイファーを筆頭にマルクス、トリノ、マリエッタが歩いていく。使用人の二人が扉を開くと、そこからは眩い庭園が出迎える。

「いってらっしゃいませ、サイファー様」

「グレース、留守は任せる」

「畏まりました。道中を気をつけてくださいませ。マルクス、トリノ、サイファー様のお世話をよろしく頼みましたよ」

「承知しております、ミス・グレース」

「畏まりました」

きっちりとした態度で送り出すグレースは、ハーヴァイアンス家のハウスキーパー。メイドたちの雇用・解雇の人事権を持ち、屋敷の管理を任される上級使用人であり、サイファーにとっては母親以上の祖母のような存在でもある。

「ささ、サイファー様。行きましょう、行きましょう」

整然を保つ中で、マリエッタだけはサイファーに馴れ馴れしく背中を押して、早く屋敷を出ようと態度が明確になる中で、グレースの眉が上がる。

「マリエッタ。お待ちなさい」

「ふぇ？」

グレースがサイファーからマリエッタを引き剥がす。

「あなたはお屋敷に残りなさい。たまっている仕事の解消が先です」

「えぇ？　あ、あの、ミス・グレース。これには山より深く海より高い事情がありましてですね……」

「ならば大した理由ではありませんね。早く仕事に戻りなさい」

「あぁっ！？　ミス・グレースッ！　私、わたしっ……サイファー様ぁっ」

首根っこをつかまれ、グレースに引かれるマリエッタがサイファーに腕を伸ばす。
「グレース。今回は構わん。俺が同行を命じた。離してやれ」
「そうでしたか。これは失礼をいたしました」
グレースがマリエッタを放す。
「そうですよ。ミス・グレースも慌てないで下さいね」
もぉ、とマリエッタが自分には非がないように言うが、それは沈黙を呼ぶ。
「馬鹿が」
「えぇっ！？　どうしてですかぁっ？」
冷静なサイファーの一言に、マリエッタだけが声を上げるが、誰一人としてこの状況下においての空気を読めていないマリエッタに、ため息を吐いた。
「いくぞ」
サイファーがそれを無視して扉を出る。
「サイファー様、お支度は整っております。どうぞ」
扉の下、石段の先に停車する黒塗りの二台の車の前で、運転手がドアを開け待っていた。
「はいはいはーい。私、サイファー様にご同行しまぁす。サイファー様、さぁ乗りましょう、はい乗りましょう」
まるでその行動は子供。マルクスとトリノの二人は呆れてものが言えないようだった。
「断る。マルクス、同行しろ」
「はい。サイファー様」
手招きするマリエッタの横をサイファーは通り過ぎ、車に乗り込み、そのすぐ後ろからマルクスが乗り込むと、運転手がドアを閉めた。
「えぇっ！？　ちょっと、サイファー様っ！？　どうしてですかっ？　開けてくださいよっ！　マルクスさんっ、変わってくださいってばっ」

ドンドンと窓に張り付くマリエッタ。車中のサイファーは、あごを前に軽く動かす。ゆっくりと車が走り出し、マリエッタがドンドンと窓を叩く。
「あっ」
小走りのマリエッタが足を引っ掛け転ぶ。車はそれを無視して走り出す。
「あぅぅ、そんなぁ……。サイファーさまぁ」
体を起こしたマリエッタの見つめる先には、すでに邸宅の外へ向かう後ろ部分だけが見えるだけであった。
「マリエッタ。残りたいのですか？」
そこへもう一台の車、主に荷物を積んだ車が横付けされ、呆れた視線で見下ろすトリノがいた。
「うぅ……。行きますぅ。行くに決まってますよぉ」
ヨヨヨ、と力なく立ち上がりながら、マリエッタも後続車に乗り込み、車は、ハーヴァイアンス家領地、ガルファージへ向けて敷地を出て行った。
「あっちゃぁ、行っちまったかぁ」
その頃、屋敷の中を急いで入ってきた顎鬚金髪の男が、息を切らし、二台の車を見送っていた。
「どうしたのです？　屋敷内で走ることは禁止ですよ、ニコラス」
仕事に戻る使用人たちの中で、最後まで見送っていたグレースが若干の不機嫌顔で見る。
「あぁ、ミス・グレース。悪い悪い。でも急いでたんだよ、こっちも」
ニコラスの腕の中には小さなバスケット。ほのかに香る香りに、グレースが気づく。
「それは、マドレーヌですか？」
「マリエッタがコック長に頼んでいたらしくな、焼き上がりを持ってきたんだが、一歩遅かったかぁ」
ふたを開けるニコラス。グレースが腕を伸ばす。

「あ、ミス・グレース？」
　ニコラスが止める間もなく、グレースは一切れを千切ると口に含んだ。
「……全く。マリエッタは仕事を放棄して何をしているのやら」
「味はどうなんですかい？　ミス・グレース」
　味について返答を得ず、ニコラスが首を傾げる。
「サイファー様のお帰りは夕刻を予定しています。これはコック長に試食させなさい」
　何事もなかったようにグレースはニコラスの横を歩き去る。
「コック長が作るよりも美味い、か。さすがはサイファー様を熟知するマリエッタと言うところか。俺もちょっくら味見を……ん？」
　食べやすいサイズのマドレーヌ。ハーヴァイアンス家を取り仕切るグレースすら文句をつけられなかった味を、ニコラスが口に運ぼうとした瞬間、視線が突き刺さる。
「な、なんだよ、お前ら……」
「副コック長、ずるいです。マリエッタさんのマドレーヌ……」
「ご自分だけ食べようなんて、ニコラスさん、せこいです」
「あぁっ、マリエッタのマドレーヌだっ！」
　バスケットに気づいた使用人たちがわらわらと集まってくる。
「あっ、こらっ、お前ら、屋敷内で騒ぐなっ。ちょっ、お前ら、それは俺んだぞっ！」
　サイファーがいた頃の整然とした空気は、たったのそれによって打ち破られる。
「全く。それはサイファー様の為のものでしょうに……」
　視察に出かけ、戻らない主のために作られたマドレーヌは、その場にいた使用人たちによって、争奪戦が開始された。
「あっ、こらっ、コック長にも一つは取っとけよっ！　つーか、俺も副コックだぞっ！　俺にも食わせろっ」
「うわぁ、ふわふわぁ～」
「すごいですぅ、マリエッタさん」

「ん～、これは美味」
「だあぁっ！　てめぇらっ！　食ってねぇで働けやおらっ」
誰もが好評を口ずさむその味に、ニコラスは一人声を荒げていた。
「やはり、あの血を引くはマリエッタだけということなのでしょうね……」
そんな騒がしさの中、グレースは屋敷の奥へと歩いていった。

「はぁぁ～……」
かすかな振動に揺れる車内。運転手と搭乗員の会話は基本的にない。前を追う車に追従する中で、後部座席では何度目かのため息が漏れる。
「マリエッタ。そのため息を止めてくださいます？　こちらの気分まで参ってしまいます」
主に外出に同行するためのメイドであるトリノは、不快な表情で隣に視線を向ける。
「でもぉ～、でもぉ～……」
マリエッタの視線はフロントガラスの向こう―――サイファーの乗る車。わずかに揺れる二つの頭に、マリエッタは口を尖らせている。
「当然でしょう。マルクスさんはハーヴァイアンス家の外交執事が一人。サイファー様のお隣を守護することがお勤めなのですから」
トリノはきっちりと後部座席のシートベルトで身を固定し、姿勢良く乗っているが、マリエッタは助手席のヘッドレストを抱きかかえるように前車を見つめる。もちろんシートベルトなどしていない。
「分かってるもん。でもでもぉ、サイファー様のお世話をするのは、私のお勤めなんですよぉ」
「あなたは元来、ナースとして私たちナースメイドを従える立場なのです。それが独断行動はおろか、主人への我侭な言動に加えての愚行。少しは恥らいと言うものをお持ちになっていただきたいのです」

マリエッタの役職はナース。トリノたちナースメイドと呼ばれるメイドを従える乳母のことであり、サイファーの躾を担当することが本来の役職。それに付き従うナースメイドはマリエッタの指示により身の回りのことなどをすることが勤め。

しかし、マリエッタはサイファーが当主の座に就いたため、オーナーズメイドとして勝手に居座っている。もちろん、そんな担当役職のメイドは存在しない。

「じゃあ、私をあっちの車に乗せるように説得してよぉ」

「あなたは馬鹿ですよ？」

疑問ではない、確定。

「うぅ、私より下位なのに、そんなこと言わないでよぉ」

ぷーっと頬を膨らませるマリエッタ。

「第一、奥様が亡くなられてハーヴァイアンス家にはレディスメイドは、サイファー様が御成婚されるまで不問職になっているのです。それをミス・グレースに主のお世話をする専門職だと、妙なことを言い出し、仕舞いにはオーナーズメイドなどとありもしない役職を勝手に立ち上げて、ナースを放棄しています。これはハーヴァイアンス家にお使えするものとして、由々しき事態なのです」

トリノが役職階級は上司であるマリエッタに苦言ではない、指摘を垂れる。

「だってぇ、サイファー様の身の回りのお世話をする人がいなくなっちゃうじゃない」

「何の為のハウスキーパーであるミス・グレースがいるのです？それにサイファー様は当主。マルクス並びにの執事が常にお傍にお使えしているはずなのです。それをあなたはいけしゃあしゃあと仕事を勝手に奪い、果ては仕事を放棄して勝手な行動を取り、ミスまで犯す。馬鹿です。はっきり言って、あなたにメイドの資格はありません」

トリノが言い切る。運転手がバックミラー越しに一瞬の視線を寄せたが、己の仕事に集中することに視線を戻した。車内の空気は一

変しての冷たさがある。
「私は、サイファー様がお疲れにならないように、ゆっくりして欲しいからやってるのぉ。マルクスさんも他の執事の人も、ミス・グレースもみんなサイファー様に固いんだもん。あれじゃあ、サイファー様が可哀想だよ」
まるで自分だけがサイファーを理解している。お前の言うことは戯言だ。と言っているようないないような、発言。マリエッタの表情はどうよ？　とどこか勝ち誇るものを見せているが、トリノは一言で斬った。
「その思い込みに振り回されるサイファー様が、一番苦労されているのです」
相手にするのも馬鹿らしいと、温度のない横目はマリエッタを強く射抜く。馬鹿を相手にしていると、傍からはどちらが馬鹿か分からなくなるように思っているようだ。
「違うもん違うもん違うのぉ。トリノは分かってなぁいぃ～」
マリエッタが頬を膨らませる。不服げだが、トリノもまた、同じ表情。
「分かっていないのは、マリエッタの方です。あなたはサイファー様を子供だと思っているのです。宜しいですか？　サイファー様はハーヴァイアンス家の御当主様なのです。いつまでも乳母気取りでいるからこそ、サイファー様が迷惑を被っているのです」
いい加減、理解しろ、こいつ。とでも視線はマリエッタを見る。
「トリノは知らないだけだもん。サイファー様はまだまだ甘えたい盛りなの。公務だ仕事だって、そぉんなことばっかりさせてる方がだめなんだから」
この分からず屋。とマリエッタもトリノを見る。この二人、上司と部下の関係でありながら、敵対関係でもあるようだ。
「サイファー様がお継ぎになられたからこそですっ。いい加減あなたも成長してください、マリエッタ」
「心の成長と体の成長は違うんだからぁ。今のサイファー様にはも

っと自由な時間が要るんですぅ。私が一番サイファーさまのことは理解してるんですから、良いんですぅっ」
　互いに譲らぬ主張に、白熱する二人。運転手は口を挟むべきなのか、何度も後ろを振り返るが、その温度差に何も言わずに運転に集中することに逃げた。
「何でも我侭が通じると思わないで下さいっ」
「我侭じゃないもんっ！　ほんとのことなんだからぁっ」
　猛獣が威嚇しあっている中で、ため息が一つ。
「こんな姿、サイファー様にはお知らせできませんね……」
　サイファーの前では使用人たちの態度は整然。それは職務に忠実な印。しかし、その裏にあるメイドたち使用人の本音に、さすがの運転手も仕事に集中するというわけにはいかないようだった。

　後続車で騒ぎが起きている中で、当主を乗せて走る車内は沈黙だった。
「……」
「……」
　運転手は運転に集中し、マルクスはガルファージでの予定や視察予定を記した手帳を開き、静かに最終の調整をしている。一方のサイファーはどこかつまらなそうに窓枠にひじを当て、頬杖をついて外の景色を見つめている。マリエッタとトリノの乗る車との対極過ぎる光景だ。
「……マルクス。ガルファージまではどれくらいだ？」
「はい。ガルファージまではこのままの交通量では、一時間四十分ほどかと」
「長いな」
「郊外の農業地域ですので」
　単調な業務会話。私生活の話題など出てはこない。執事たるもの主人の補佐をし、不要な会話は挟まない。主人の私生活のサポートをする傍らで、その生活を乱すことはしない。守ることこそが勤め

であり、車内での会話も、マルクスからというものはない。
「マルクス、今日は何箇所の視察だ？」
「予定は四箇所になっております。まずはハーヴァイアンス家所有のブドウ園およびワイナリーにて、収穫、出荷作業を視察、その後領地内にて農作物と畑の視察、これは近年の水不足による不足への対応策検討会の方がご同行される予定です。その後、昼食を挟み、孤児院、村の視察を行い、帰路に就きます。邸宅到着予定時刻は午後八時過ぎとなります」
　マルクスの言葉も、サイファーは背もたれに身を投げて聞く。
「連日のご公務によりお疲れのこととは存じます。ですが、これもハーヴァイアンス家としては……」
「分かっている。領地を守るのは公爵家の役割だ、だろ」
「はい」
　分かりきったことを言うな。サイファーの言葉には感情がなかった。
「サイファー様」
「何だ？」
　バックミラー越しに冷めた視線が運転手を見る。
「後続の様子が少しおかしいようでして」
　運転手の視線が後ろを走る車を捕らえ、マルクスとサイファーも身を乗り出し、後ろを見る。
「……何だ、あの走り方は」
　サイファーの怪訝な視線の先、後続車が直線道を蛇行している。
「ドライバーの体調が優れないという様子ではないようですね」
「またマリーの馬鹿か……」
　視線の先では、後部座席で何やらもめている二人のメイドを捕らえ、サイファーの舌打ちが車内に響く。
「トリノまでなにをしているのでしょうか、全く」
　トリノをそれなりに評価していたらしいマルクスも、その光景にあきれた息を吐き出す。

「ハイク、車を止めろ」
車が停車する。後続車もそれに次いで停車した。
「マルクス、すまんが」
「はい。あのような運転をされては恥をさらすでしょう。交代してまいります」
何も言わずとも伝わる両者の言い分。マルクスは書類や手帳をそそくさと仕舞うと車を降りる。それと同時に後続車から勢い良くマリエッタが飛び出してくる。マルクスと何やら二、三、言葉を交わした後に駆けてくる。それはそれはうれしそうな笑顔を振りまき、髪を揺らしながらマルクスとの入れ替わりに乗り込んだ。
「サイファー様ぁっ！」
嬉しそうなのだが、トリノとの争いにまだ怒っている部分でもあるようで、ほっとした様子で車に乗り込んだ。
「お前はどこまで恥を晒したいんだ、この馬鹿がっ」
「ひぅんっ！？」
だが、ドアを開けて身をかがめて乗り込もうとした瞬間、サイファーがマリエッタの耳を掴んで強引に車に引きずり込む。
「いたたたたっ！　い、痛いですっ、痛いですってばぁっ」
「ハイク、車を出せ」
「畏まりました」
マリエッタの悲痛を無視して車は再び走り出す。今度は二台とも静かに走り出し、事の原因がマリエッタであることの裏が明確に現れた。
「痛い痛い痛いですぅぅっ！」
走り出す車内で、マリエッタは首をサイファーの方へ強敵的に傾けさせられている。
「移動中すらおとなしく出来ないのか、お前は」
サイファーの表情に笑顔というものはない。冷静で冷徹。運転手はまるで気にかけることもなく車を走らせ、町の中を抜ける。広がりを見せる穏やかな農業地帯の景色。それを見る楽しみもなく、マ

リエッタは痛みを訴える。
「ご、ごめんなさいぃ。で、でもでもぉ、トリノが悪いんですよぉ」
自分のことは棚に上げる主義。とでも言うべきか、サイファーの視線と耳を引っ張る力は比例していた。
「いたたたたっ！」
「嘘をつくな。お前が下らんことを喚いたのが原因だろうが」
「わ、喚いてなんていないですよぉ。トリノが話を聞いてくれないからなんですぅ」
サイファーの苛立ちは、いい加減頂点を迎えようとしているのか、余計な波風を立てるなと強い視線が訴える。
「話？　何だ？」
「わ、私は、サイファー様にはもっと甘えて欲しいんです。でも、でも、トリノが、そんなことをしちゃダメって言うんですぅ。というよりも、みんなが言うんですよ？　私はサイファー様の乳母なんですよっ。お世話をするんです。でもでも、みぃぃんな、ダメダメ言うんですっ」
主人に対して堂々と愚痴を吐くマリエッタ。サイファーはその言葉に、マリエッタを静かに見た。
「私はサイファー様をずっとお側で見てきたんです。なのに、誰も私のことを信じてくれないんですっ。ひどいですよねっ！？　ミス・グレースだって、そうなんですよっ。サイファー様はまだまだ一人でお仕事なんて早いんです。すぐに体調崩しちゃうます。……全くぅ、どうして誰も信じてくれないんですかね、ねっ、サイファー様？」
一人憤慨するマリエッタに、サイファーは言葉を失っていた。幼い頃よりの姉のように身の回りの世話から躾までを担当した。未だにサイファーにしてみればその存在は大して変わっていない。だからこそ、サイファーにしてみれば、最も素の自分を見せている人物がマリエッタ。その言葉に感銘を受けないわけがない。たった一人だけの理解者なのだから。

「あ、あれ？　サ、サイファー様？　……あ、あの、その手は、何でしょう？」
マリエッタの表情は笑顔。訝しげ笑顔。サイファーの腕が伸びてくる。マリエッタ的には、自分、良いこと言った。なのに何故怒ってらっしゃるの？　といった具合にマリエッタが窓際に移動する。
「ひぅっ」
「お前という奴は……っ」
そっと頬に触れてくるサイファーの手に、マリエッタは覚えのある恐怖に、小さく声を漏らす。
「いひゃっ」
その瞬間、サイファーの腕がマリエッタの頬を抓った。むにゅっと抓まれ、引っ張られる頬。肌は柔らかいようでよく伸びている。しかしマリエッタは自分で解くそぶりを見せることもなく、ただそれを受け入れる。
「俺はもう子供じゃない。トリノの言葉が正しい。お前はいつの俺を見ている？」
瞳に涙が宿るが、サイファーは手加減なしに頬を引っ張る。
「う、うふぉれふほぉ」
しかし、マリエッタは我侭だった。
「嘘だと？」
「そ、そうれふ。さふぃふぁーさふぁ、たろふぃふなふぁふぉうれふふぉん」
何を言っているのか分からないが、サイファーは頬を解放した。
「これは公務だ。楽しくなさそうなんてことを考えるか馬鹿。領民を守ることが役目だ。お前はいちいち反応せずに、するべき仕事をしていれば良いと言っているだろう」
「し、してますよぉ。私、オーナーズメイドなんですからぁ」
「そんなもの、俺は許可をしていない。お前はナースだ。もう俺の世話をするメイドじゃない。分かるか、この意味が」
もちろん、ハウスキーパーのグレースもだ。ナースは基本的に主

人と婦人の子供の世話をする。しかし、今、サイファーは当主として使用人を従える主人。その世話は執事へと移行することが本来の慣わし。それに伴い、子供のいない家ではナースは解雇を言い渡され、他のお屋敷へ配属されることなどが一般的。
「良いんです。私はサイファー様のお母上様にもサイファー様を頼まれているんです。それに、お母上様は仰って下さったんですよ」
マリエッタに首を傾げるサイファー。本来の思春期の子供らしい、あどけなさの残る顔を、無理やりに大人へと引き締めているような表情が日常的だが、マリエッタの言葉に出てきた母についての発言に、表情が解ける。
「サイファー様のことを誰よりも知っているのは私です。だから、サイファー様のことを、どんなことがあっても、誰よりも理解してあげなさいと私だけに仰ったんですよ」
「母上が？」
意外に思ったのだろうか。サイファーが考えるように言葉を待つ。
「はい。耳の穴をかっぽじって聞きました。間違いありません。私だけにです」
やけに自分を強調するが、サイファーはそこは聞き流していた。いまさら言葉遣いは、サイファーもいちいち相手にする程、暇ではないのだろう。
「ですので、私がサイファー様のことは誰よりも知りえる者なんです。私の言ったことは、サイファー様の言うことも同じ。……あ、なんか今のって相思相愛って感じがしません？」
自分の発言に酔っているマリエッタ。
「ハイク、途中の農道にごみを捨てる。適当なところに車を止めろ」
サイファーが命じる。
「へ？　サイファー様、ごみなんてお持ちになっていたんですか？」
マリエッタは天然なのだろう。車中にごみ一つないというのに、サイファーの言葉にごみを探す。
「サイファー様、宜しいのですか？」

「構わん。馬鹿には目を覚まさせることも主が務めだ」
運転手がバックミラー越しにマリエッタを何度か見る。今ならまだ引き返せる。そう視線が訴えているが、マリエッタはその視線に気づくことはなかった。やがて、通りのなくなった穏やかな牧草が広がる道に車が停車する。トリノとマルクスの乗る車も、状況が分からないようで、二人が顔を見合わせていた。
「マリエッタ。トランクにあるものを置いていけ」
「へ？　あ、はい。トランクですね。少々お待ちくださいね……へ？」
サイファーは前を向いたまま。運転手は最後の最後までマリエッタに視線を送っていた。お前がそのごみ扱いされているんだ、と。
「ハイク。車を出せ」
「よ、宜しいのですか？」
「早くしろ」
「は、はい」
マリエッタが外に出て、ドアを閉めた時、マリエッタはサイファーに言われトランクへ歩き出そうとした瞬間に、不自然なことをようやく気づけたのか、ゆっくりと振り返る。
「あ、あぁっ！？　サ、サイファー様っ！？」
振り返ると同時にサイファーの涼しげな横顔がマリエッタの背中へと進んでいく。
「も、もしかしてっ、ごみって私だったんですかぁっ！？」
冗談半分にしていることではないと、走り出す車の加速が本気だった。
「ひどいですぅっ！　って、ちょっとっ！？　サイファー様っ！　ハイクさんっ！　車を止めてくださいってばっ！　て言うか、置いてかないで下さぁぁいっ！」
マリエッタが慌ててスカートの裾を摘み上げながら走り出す。事の事態を把握した後続車もゆっくりと加速し、車道に戻る。
「鬼ぃーっ！　悪魔ぁーっ！　人でなしぃーっ！　って、あぁっ！

？　加速しないでくださぁぁーいっ！　サイファー様ぁっ！」
　メイドの制服は職において多少の異なりを見せる。その中でナースメイドの着用する服装は基本的に主人の側に仕えるため、それなりに洗練され、失礼のないよう、その上で主人より目立つことの無いように、スカートが長く、多少分厚い。故に走りにくいと言う欠点があるが、マリエッタは必死の形相で走る。サイファーへの暴言を吐けば、サイファーの沸点に触れ、きっと車は止まるだろう。そんな安易な考えで叫ぶが。車は冷房を利かせているゆえに、声など届かない。
「あぁんっ！　すみませんでしたぁっ！　私が悪いんですぅーっ！　全て私の責任ですぅーっ！　だからっ、置いていかないでぇぇ――――っ！」
　怒りがダメなら泣いてみろ。びえぇぇん、とマリエッタが反省の涙を流しつつ、必死に走る。メイドにはあってはならない表情。
「何をしているのです、マリエッタ？」
「またサイファー様のご機嫌を乱すようなことをしたのか？」
　後続車の窓から、トリノとマルクスが走るマリエッタに横付けして聞く。
「ち、違いますっ。わ、私が、ちょっと降りたいと思っただけですぅ。早く行けば良いじゃないですか」
　息を切らせるということを見せることのないマリエッタ。車の速度は遅いとは言え、それなりに速度は出ていた。そして見栄を張る。しかし二人には想像出来る事態でもあったが、あえて触れることはしなかった。
「そう。ではくれぐれも恥を晒さないで下さい」
「お、おい、トリノ。幾らなんでもだ。すまんが車を止めてくれ」
　トリノはもう一緒に車に乗ることが嫌なようで、早く行ってとマリエッタを気遣う様子を見せない。しかし、執事として使用人をこんな農業地帯に野放しにすることに、ハーヴァイアンス家としての面目を考慮しているマルクスは、車を止めるように言う。

「い、いりませんっ。トリノと一緒なら、走った方がマシですぅ」
散々サイファーのことを言い合い、結局意見が交差することのなかったマリエッタは、トリノとまた一緒に乗ることを強く拒んだ。
「だそうです。マルクスさん、行きましょう。私もマリエッタにつき従うのは遠慮願いたいですから」
「しかしだな……」
「マルクスさん、平気です。私は別に良いので、出してください」
マリエッタの脚力は人間には思えないほどに疲労を見せず、並走していた自動車を少しずつ追い越していく。
「マリエッタがそう言っているのです。サイファー様に遅れを取るわけには参りません」
「……マリエッタ。くれぐれも、あれは使うな。サイファー様にご迷惑がかかる」
「承知しています。私がサイファー様のことを誰よりも愛して、存じているんです」
窓を閉めると、車はマリエッタを追い越していく。
「サイファー様も不必要なナースをいつまで任せると言うのか……」
「マリエッタのような者が世間様へ露呈しないだけでもサイファー様のお心使いであると諦めるほかはないのでしょう。第一、マリエッタの強固さをどうにかできるのは、私たちでは無理なことでしょう」
トリノの振り返る先、本当に置いてけぼりを食らったマリエッタが走っていた。サイファーの乗る車は停車することなく、ガルファージへ向けて走行する。
「あれほど心を持つものなのだろうか、あれは……」
「私には分かりかねます」
マルクスの多少の気がかりを他所に、マリエッタは農道をひた走っていた。
「んもぉ、サイファー様のドエス――――っ！　馬鹿ぁ――――っ！」
そんな叫び声も平坦な農地を突き破り、風の中に消え、二台の黒

塗りの高級車は遠ざかっていった。

一話．マリエッタ（後書き）

閲覧ありがとうございました。

これからは本来の執筆用パソコンで執筆が出来るので、ここでの更新も本流に戻します。

本流としての第一弾は、長らく滞ってしまっていた「明日のキミへ」です。

更新予定日は２５日か２６日になります。

第二話．空飛ぶマリエッタ（前書き）

少しばかりの更新です。

時間がなく、書こうと思っていた展開まで書ききる前でしたので、少し物足りなさがあるかもしれませんが、次からはまたはちゃめちゃ系にもどるかもしれません（笑

第二話．空飛ぶマリエッタ

「まもなくガルファージに到着いたします」
マリエッタを捨てて？　からかれこれ一時間。お遊びで下ろしたわけではなく、至って本気でマリエッタを二台の車は見捨てた。その先頭を行く車内は実に静かで、会話などマルクスの説明が入るだけで、サイファーも自ら口を開くことなく、車窓に肘をつき、静かに眺めていた。この状況で眠気を誘われそうだが、ハイクは運転に集中し、マルクスはT機折り休憩を挟むように静かに息を吐き、車窓を眺めては再び書類を見ていて、サイファーだけが手持ち無沙汰のようであった。
「疲れたな」
「もうしばしの辛抱にございます」
一見して広がるのは、農村地帯。平坦な道のりは、やがて少しずつ勾配を増し、一面の小麦畑から、緑が姿を現す。しかし、その緑は森林としての山の緑ではなく、規則正しく、かつ、背丈の小さな緑が並んでいる。満遍なく日光が当たるように山を爆破してその岩石を積み上げ、段々畑の山へと改良し、そこに植えているのは葡萄。ワイン製造の盛んさを思わせる光景。それでもサイファーは興味なさげにそれを見ていた。
山間部を走る車の左前方に、ガルファージに入ったことを知らせる看板が車窓を流れていくと、山間に平坦な土地が現れる。
「ようやく着いたか」
町並みは至って平凡。村を多少華やかにした程度で、それほど賑わいのある町というわけではない。その中でどころ狭しと看板が並び、その全ての表記にはワインと記されている。
ハイクの運転する車が、その中の一軒のワイナリーへと入り、駐車場に止まる。
「ご到着いたしました」

マルクスがまず車を下り、反対側へ廻るとドアを開ける。
「ん」
外気の爽やかさにサイファーが大きく息を吸い込みながら車を降りる。後続の車からもトリノが大きめのバッグを持ち、下りた。その中には恐らくサイファーの身の回りの世話をする為の道具が入っているのだろう。サイファーがマルクスと共にトリノの前を通り過ぎると、トリノは頭を下げた。
「ハーヴァイアンス・サイファー様。お待ちしておりました」
それをワイナリー入り口で待機していた所長が迎える。サイファーよりも四倍程は生きているだろう。多少体が太り気味だが、人柄は良さそうな表情をしていた。
「本日はヴィアンスワイナリーの視察を兼ねた今後の経営方針の打診に参りました」
マルクスが手短に用件を伝える。
「案内しろ」
「こちらへどうぞ」
サイファーが歩き出すと、所長が先頭を歩いてワイナリーへ入っていく。
「あぁ、それからそちらのメイドさん」
「はい？」
だが、思い立ったように所長が足を止め、トリノを呼ぶ。
「ご昼食には、ぜひテラスをご使用下さい。ブドウ畑が一望出来る場所ですから」
自慢したいようで、所長がそう促すと、トリノはサイファーを見る。
「厚意は受け取っておけ、トリノ」
サイファーが承諾の返事をする。
「かしこまりました。ご用意いたしておきます」
自己決定力はないようで、トリノはサイファーの意見に従いサイファーとは別行動に歩いていった。

「経営はどうだ？」
「はい、おかげさまで前年度の三十六％増を更新しております。今現在ガルファージは水不足ですが、それでもワインにとってみれば濃縮された甘さに一段と深い味わいのワインが出来そうです」
ワインは葡萄を生産するに当たって、大量の水は厳禁。葡萄の木が生長しすぎたり、葡萄が瑞々しさを過剰にもつと上質なワインが生産出来ない。しかし、水不足も枯れてしまう。年間降雨量が５００～９００ミリが最適と言われているが、所長はそれほど深刻視はしていないよう。
「元来の地下水の貯水量に加え、土壌の保水性質も相成っているのでしょう」
マルクスが補足を言葉にすると、所長が肯く。
「他の農作物にしてみれば少量なのでしょうが、ブドウに関しては今年は日照にも恵まれ、上質でフルーティーなものが生産できることと思います」
「そうか。今年の出荷総量は幾らくらいになりそうだ？」
それでもサイファーは未成年。ワインを口には出来ない。そのせいか、所長がワインの話をしても、あまり興味を示さず、数字を求める。
「今年の年末前には新酒として、三万七千本を国内、海外へ出荷を見込んでおります。その他のワインを合わせますと、約十万本を卸す予定です」
ワイナリーとしてはその本数は必ずしも多いというわけではない。生産量に限界があり、ワインの生産には月日を置く。それはそれだけの設備を必要とし、需要ある限り供給できるものではなく、所長の言う予定がこのワイナリーでの限界生産量でもあった。
「このあたりの畑をいずれは統合して、他のワイナリーと合併すれば、まだ上がるんじゃないのか？」
サイファーの率直な疑問に、所長が首を捻る。
「確かにそうであれば、ガルファージのワインの生産量は数十パー

セントは上がるかもしれません」
「サイファー様。我がハーヴァイアンス家が出資しているワイナリーはヴィアンスワイナリーとシャルテナワイナリーです。他のワイナリーに至っては、いずれも社交界でのご存知の顔ぶれの企業様方が出資されているので、それは現段階では厳しいのです」
所長とマルクスに言われ、つまらなそうに、小さく舌打ちをサイファーが響かせる。経営統合し、ガルファージを活性化させる。しかし、単純にそう思うだけでは商売にならないと、所長とマルクスがサイファーの考えに注釈した。
「いずれのワイナリーも経営危機というわけではありませんし、どのワイナリーにも特色あるワインを製造していますから、地域一体を、というのは我がハーヴァイアンス家領地であろうと、他への懸念が残されます」
「……そう言うことです、サイファー様。ウチにしてみればありがたい限りなんですがね」
所長が苦笑するが、サイファーは統合による利益の配分、生産高の格差、雇用、給与、税収などを少しはシュミレートしたのか、二人に言われると、それ以上その話題を持ち出しはしなかった。
「畑を見に行く。どこだ？」
「あ、はいはい。こちらでございます」
ワイナリーで販売されているワインを見ていたサイファーは、窓の外の緑の方へ歩く。
「……強権に出ない辺り、サイファー様も成長されたようですね」
先を歩いていく二人に、マルクスは少しだけ口端を上げて、小笑いを浮かべていた。
「これがブドウ畑なのか……」
外に出たサイファーの視界は、一面のブドウがまだまだ緑の実りを保っていた。涼やかな風が葉を揺らし、サイファーの前髪を吹き抜けた。
「ええ、ここから見える土地は全てウチのワイナリーなんですよ」

所長が満足げに見渡す。
「こちらのブドウは貴腐ワインとして、ハーヴァイアンス家に納品されるものを覗き、国王陛下への上納されるものが生産されています。そのうちの約三割が市場へ出され、主に三ツ星以上へ下ろされています」
マルクスが補足説明を加えると、サイファーの表情が若干不満げにマルクスを見る。
「一般市場へは出ないのか？」
これだけの畑があるのだから、もっと一般家庭に。そう視線は不満を持つ。
「一般のテーブルワインとしては、近隣のワイナリーと共にガルファージワインとして、この畑の向こう側の畑で作っているんです、サイファー様」
所長がテーブルワインとして別の畑を共同で生産しているというが、サイファーの表情は晴れない。
「何故貴腐ワインだけに拘る？　ガルファージは生産高として利益が出ているわけではないだろう？」
「サイファー様、ワイナリーには特徴が必要なのです。我がハーヴァイアンス家領地での生産高を支える為にも、貴腐ワインとしての生産とテーブルワインとの生産には調整を持つのです。今年のように恵まれた気候である場合には……」
「貴腐として投資にあてるのだろう？」
マルクスの言葉をサイファーが掻き消し、マルクスが短く肯いた。
「これだけの土地を有しての生産高が低い。これからはガルファージワインの方へも力を注げ。閉鎖的ワインにこれからの未来は見えん」
サイファーの率直な物言いに、所長とマルクスが顔を見合わせ、渋らせる。そうすぐには方向転換は出来ないと表情が言っている。
「サイファー様、ワインには年間を通しての生産をワイナリーにてそれぞれ予め計上しております」

「なので、こちら側としては、自在に生産を切り替えるわけにはいかないのですよ」
二人の反応はやはり良くはない。だが、サイファーはそんなものはどこ吹く風だった。
「なら、本年度の出荷が終了する前に会合を開く。今後の計画を一新する。マルクス、期日の調整と各ワイナリーへ通達しておけ」
話しは聞かない。それは既に決定事項として処理されてしまう。サイファーがこの土地を所有する領主である以上、強行決定ではなく、会合による編成を開くと決めた以上は、従う他はない。この地で経営を続けるには。
「……畏まりました」
それでも二人は少々困り顔でもあった。
「では、出荷作業へご案内します」
これからワイン畑は枯れを迎えてブドウはしおれていく。だが、ワインには相応しい熟成されたブドウが出来上がる。サイファーは近くのブドウを一粒摘み、口に運びながら所長の案内にワイナリーへと戻る。
「甘いブドウも、もっと民へ広めなければ、衰退を辿るだけだ」
そんな一言を、誰にも聞き取られることもなく、風の中へ消えていった。

「はぁ、はぁ……」
実に閑散とした田園風景。緑の絨毯を風が撫で、路傍の野の花が鮮やかに陽光を浴びている。
「う、うぅ～……ほんとに見えないじゃないですかぁ～」
その中を影のように黒いメイド服を纏い、遠くに見える緑の山へと続く道を望む中で、マリエッタは走っていた。既に走り去った二台の車の姿はマリエッタの視界にはない。
「酷いですよぉ～……こんなことってなしじゃないですかぁ～」
マリエッタは走る。誰もいない道をただひとり。しかし、その走

りには遅れはなく、一定の速度と歩幅でスカートを両手で持ち上げながら、軽く呼吸を整える呼吸だけで走る。疲労はそれほど見受けられない。
「私何も悪くないのにぃ～……」
マリエッタの口からは誰にも聞かれることのない愚痴ばかりが飛び出す。片田舎を走るメイドと言うのは浮いている。しかし、それを恥じることもなくマリエッタは不満だけを垂らせている。
「これじゃぁ、何のためにご同行したか分かりませんよぉ～」
愚痴から少しずつ泣き言に変わっていく。
そして、ふとそこでマリエッタの走りが止まる。
「……誰も見てないですよね？」
周囲を警戒するようにマリエッタが視線を向ける。幸いなのか単に寂れているのか、見える田園風景には動物と言う生き物の姿は見えない。もちろん人間の姿も。
「トリノとマルクスさんにはダメって言われたけど、このままじゃ、サイファー様がトリノに取られちゃうんだし、良いよね？」
このまま走っていったところで埒が明かないと判断したようで、自分が到着した時にはもうサイファーは屋敷へ戻る頃かもしれないと、マリエッタが、スカートを持っていた手を下ろし、スカートの裾が再び露になっていた足を隠す。
「サイファー様とのお約束は破っちゃうけど、別に誰も見てないんだし、気にしない気にしない」
マリエッタが自己正当化するように笑う。それは忠義を尽くすサイファーへの裏切りへの心残りを払拭するように笑っていた。
「サイファー様、ごめんなさい……でも、サイファー様が悪いんですからねっ」
最後の最後まで、自分に非があることを認めることはなく、あくまで責任転換として他者への責任として、自分を棚に上げて、もう一度周囲を警戒する。
「誰もいませんよね。うん、いないです」

大きく一人でマリエッタが肯く。そして、大きく息を吸い込むと、サイファーが走り去っていった山の方を見つめた。
「マリエッタ。エネルギー５０％脚部噴出孔へ装填、射出ッ！」
マリエッタがそう言うと、マリエッタの足から激しい土ぼこりが立ち上り、スカートが大きく捲れ上がる。当然、スカートの下の白い下着がストッキング、ガードルと共に露になる。だが、誰もそれに注目する者はいない。
「サイファー様、待ってて下さいねっ！　すぐにお傍に参りますからっ」
マリエッタが空を見上げる。真っ青な空に白い雲がのんびりと流れていく。しかし、その足元は車のエンジン音など掻き消してしまうような轟音と共に、道路と隣の畑の細かい土が舞い上がり、現実離れした存在の尊厳を主張するようにマリエッタは激しい風を纏い、下ろしていた腕を横に広げた。
「マリエッタッ！　いっきまーすっ！」
マリエッタがジャンプするように大地を蹴った。すると、吹き上げていた土ぼこりの中から、空に向かい、白煙が全てを吹き飛ばすように、田園風景の中に吹き上げた。地を蹴ったマリエッタは、そのまま重力に引かれることはなく、そのまま轟音と共にスカートを大きくはためかせて、空へと飛び上がった。
「サイファー様ぁっ！　今行きますよぉっ！」
誰も見ていない空。鳥たちすらも見えないその空で、マリエッタは地上から見上げる空には白い下着をおおっぴろげにしたまま、白煙を吐き出す蒸気機関のように空高く、サイファーの向かったガルファージへ向けて空を切り裂いた。それは航空機でもなく、鳥でもなく、虫でもなく、轟音と共にメイドが空を飛ぶ非常識、非現実、理解不能の現状だった。

第二話．空飛ぶマリエッタ（後書き）

次の更新は三世界戦争です。

更新予定日は１３日後半以降を予定してます。

第三話．サイファーの視察（前書き）

だいぶ遅れての更新です。

気づけば半年前ですね（＾＾；

自分でも改めて読み直さないと話を忘れてしまってました。

今回はもう少し続けようと思いましたが、長くなりそうだったので、区切りました。

大変遅くなり申し訳ありません。

第三話．サイファーの視察

「……なぁんて、空とか飛べたら、サイファー様の元までひとっ飛びなんですけどねぇ」

ぱたぱたと、マリエッタがメイド服のスカートを仰ぐように振る。当然、今までの現象など、何一つ変わらず、マリエッタは誰もいない一本道で、一人寂しい芝居をしていた、というだけが継続されていた。

「はぁ……ほんとに置いていくなんて、サイファー様、容赦なしなんですからぁ」

誰もいない静かな田園風景。緑豊かな中に、ポツリとマリーが浮き立っている。

「ガルファージまで、行くしかないんですよね～……」

再びマリーのため息が空に消える。それでも足取りは前へ進んでいく。後ろから真っ赤なトラクターがのんびりと走り、やがてマリーの隣を越えていく。

「もぉ～、遠すぎですよぉ、こんな所」

マリーが背後を振り返り、誰もいないかを確認する。

「誰もいないですよね？　……うん、大丈夫」

誰もいないと分かると、唐突にマリーがメイド服のスカートを捲り上げた。日に焼けない白い足が太ももまで露出し、しなやかな足が露になる。

「いくら私を見捨てようとも、このマリエッタ、主の側が私の居場所。サイファー様、待っていて下さいねっ！　今から行きますからっ！」

そして、マリエッタが大地を小さく蹴り上げて、大幅に足を露出して走り出す。既に遠くに走ろうとしていくトラクターの背中に、その先にいるであろう、サイファーを求めて。

「っくしゅっ！」
用意されたテラスには前菜の野菜を使用した色鮮やかなテリーヌが置かれる。それを見たサイファーが、可愛らしいくしゃみを洩らす。
「サイファー様、お体がお冷えになられましたか？」
マルクスが日当たりに寒さを感じないこの場所でさえ、サイファーの体に障るのでは？　と気遣うが、サイファーはマルクスに手を上げる。
「いや、マリー辺りが悪口でも叩いているんだろう」
キッと、そこにはいないマリエッタに対し、不満を口にしつつランチに手を動かす。
「マルクス、この後は視察になるのか？」
食べ終わるとトリノが食器を提げ、あたらな食事を運んでくる。サイファーはその純白のさらに可憐に盛られた料理には目をくれることなく、マルクスに予定を尋ねる。
「はい。昼食を先にとられたために、少々予定を変更し、対策検討会の方々とは現地にて合流し、その孤児院、村の視察を行います」
マルクスとトリノは、サイファーが食事をするのをそばで待ち、自分たちは食事を取る様子すらない。
「サイファー様、一つ宜しいですかな？」
同じように食事を囲んでいたワイナリーの所長が不意に口を挟む。
「何だ？」
温度のない冷たい瞳に、年甲斐もなく大人が子供に少し萎縮を見せる。だが、咳払いを一つに、所長が口を開く。
「あまり大きな声では言えないのですが、対策検討会には、どうもハーヴァイアンス家へ不満を抱くものが多いようで、今回の件に関しても、快く思わない者もいるようでして……」
周りにはサイファーたち以外誰もいないが、所長は体を乗り出すようにサイファーに話す。
「マルクス」

所長の言葉に、サイファーはただ、名前を呼ぶ。
一歩前に出たマルクスがサイファーに耳打つように体を曲げる。
「あまり公にはでてはおりませんが、この不作への対策が遅れていることが市民へのハーヴァイアンス家への不信に繋がっているようで、地域格差の是正を掲げ、中には謀反を計画する者もいるという情報はあります」
「対策は？」
所長が何を話しているのか、と少しばかり気になるように視線を向けるが、サイファーはそんなことには目を向けず、話を進める。トリノもまた、仕事に集中するように食器を下げる。
「ハーヴァイアンス家より、身分を隠しての調査員を数名既に派遣し、人物の特定には至っております。しかし、まだ行動に移る兆しが見えないため、調査を継続させております」
「無意味に拘束はするな。これから実際に視察して様子を探る。お前も別行動で探れ」
「はい」
所長には聞こえていなかったようだが、サイファーの表情は少しばかり険しくなっていた。

「では、サイファー様、道中のご無事をお祈りしております」
昼食を切り上げたサイファーはワイナリーで入り口に用意された車に乗り込む。サイファーが照らすから車に直接戻ったというのに、既に片づけを終えた様子でマルクスがドアを開け、トリノは後続する車の前でサイファーが乗り込むのを待っていた。
「今後の生産計画については追って連絡する」
それだけを言い残し、サイファーが乗り込むと、マルクスが所長と一言言葉を交わし車に乗り込み、車が動き出す。
「……やれやれ。どんな子供かと思ったら、恐ろしく冷めた子供だな」
そんな所長の、緊張が解けたように洩らす吐息を背に受け、車は

山間部を降りていった。
「……」
走り出した車内は再び沈黙していた。マルクスは相変わらず予定が変更になったことを調整するようにペンを走らせ、運転手は運転に集中し、サイファーは外の景色に視線を動かしていた。
「いかがなされましたか？」
マルクスからはサイファーの表情は伺い知れないというのに、マルクスはそれに気づき声をかける。
「山間部から緑が減ったな」
意見を答えるわけではなく、ただ感想を述べるだけ。だが、その視線の先には下る景色の中に、緑が減り、徐々に黄土色の景色が色を放つようになる。
「この地域は元々降水量が他地域より少ないのです。その分を灌漑農法により補っておりますが、他の作物へ供給される水量には満足に達していない為、土壌環境が必ずしも肥沃というわけではないようです」
サイファーはマルクスの説明を聞くだけで答えることはない。相手がサイファーを知らない人間であれば、それは不安に駆られる沈黙だろう。
「栽培作物は？」
「はい。ガルファージでの作付面積の大半を占めるのは、主に根菜類となっております。肥沃ではない土壌にも強く、効率的な生産が調整出来ますのが、疫病に晒されやすいという難点が、現状では収穫高に影響しているものと」
緑が少ないとは言え、山を下ると一面に背の低い緑が所々に広く分布している。じゃがいもや人参などを栽培しているようだが、休閑地のような畑もそれに合わせて見られた。
「生産調整のためか」
サイファーはそれが、水不足による生産調整で畑が使われていないことに、小さく悩む息を吐いた。

「間もなくおつきします」
運転手が始めて口を開くと、フロントガラスの向こうに、人だかりが小さく見えていた。
「水を使わず、貧困な土壌でも育つ食物、か……」
耳を貸していないサイファーは、それでもただ外の景色を眺めるばかりだった。
やがて車が畑の路肩に停車する。すると待ったいたかのように数人が車の方へやってくる。誰もがスーツに実を包み、決して貧困に苦しんでいる様子のない、肥えた体つきをしていた。
「お待ちしておりましたぞ、ハーヴァイアンス家の当主様」
当然のように開かれたドアから、サイファーが降りたつ。一礼するマルクスにも顔を向けることも無く、サイファーは目の前で手を差し伸べる男を見る。
「随分と肥えた腹だな。畑はこれほどやせ細っているというのに」
サイファーはその手を握ることなく、男のスーツを見て、そう言い放った。たった二言で場が、恐ろしいほどに冷たくなる。
「サイファー様、こちらの方々はガルファージの農業協同組合の方々です」
「対策検討会の連中だな」
にこやかな笑顔が凍りついた面々に、ふん、と鼻を鳴らし通り過ぎるサイファー。馴れ合うつもりは無いらしい様子で、サイファーが先に牽制し、空気が重くなる。だが、そんなものに気をかけず、サイファーは男たちの奥でやせた体と貧相ないでたちの農夫たちの方へ歩く。
「ちゃんと食事はとっているのか、お前たち」
「これはこれはハーヴァイアンス様。お初にお目にかかります。私は……」
目の前に来たサイファーに農夫が深々と頭を下げ、挨拶をしようとする。
「そんなものはいらない。ちゃんと食事を摂っているのかと、聞い

たんだ」
だが、サイファーは自らそれを打ち切り、問いに答えさせる。一瞬農夫たちが怯えたようにサイファーを見下ろすが、サイファーは強い眼差しでそれを見上げる。
「い、いえ。このところの不作で、市場へ出せる作物が少なく……」
語尾が弱くなる農夫。
「いかんせん、この地は深刻な水不足ゆえに、農作物のどれもが規格外として出回らんとですわ」
そんな農夫に言葉を被せてくるのは対策検討会の人間。サイファーが振り返ると、その男たちは誰もが強気の表情に戻っていた。
「お初にお目にかかります。私はガルファージの農協で会長を務めております、エーダ・ライコネンと申します。以後お見知りおきのほどをよろしくお願いしますぞ、サイファー様」
誰よりも食うに困った様子の無いライコネン。サイファーが一瞬のにらみを利かすが、まるで怯むことはない堂々たる態度でそこにいた。
「この地は元々トマト、ジャガイモの産地でしたが、近年の状況に、トマトはご覧の通りに枯れ果て、ジャガイモも満足いかない土壌の貧困に実の締りが悪いものばかりでして、規格外として市場を通らんのですわ。ハーヴァイアンス家よりの援助に頼ることを、切にお願いしたくお待ちしておりましたのですわ」
どこか不敵な表情を見せるライコネンにサイファーは何も答えず、検討会の人間を見回す。農夫たちとは異なり、生活に苦しさをみせているようには見えない。
「それは後で話を聞く。まずは近年の生産状況を聞かせろ」
サイファーは畑を見回し、検討会の人間の話しに耳を傾けていた。
「例年であれば、このガルファージの農耕地帯は有機栽培にこだわり、灌漑用水を利用しての、豊富な水資源と栄養源にハーヴァイアンス領の中において、自慢ではありませんが豊富な生産を元に、市民へ安く美味しい野菜を提供しておりました。それが近年の降水量

の減少により、灌漑の水資源はワイン用のブドウ畑に多くを回され、価格競争の低いこちらの野菜へ回る分が不足し、規格にそぐわない小さいものや、害虫などによる被害を被ってまいりました。ハーヴァイアンス家よりワイン製造へのお力の入れようにはご理解を示しますが、その悪影響を我々は被ることになってしまったのが、この現状を生み、多くの農業就労者が廃業をやむなくされ、ガルファージの活気はご覧の有様になってしまったのですわ」

ライコネンの説明に、他の検討会の人間からも、批判的な声が上がる。

「確かに、ハーヴァイアンス領において、ワインは名産であり、国へ献上される一級品であることは我々も認識しております。しかし、それを足元で支えるべくの我々への対策が至らぬ点であることは、是非この機において、改善を要請したいと、我々は望んでいるのです」

遠まわしのようで、結論からすれば、サイファーには市民生活が理解できていない。当主として恥を知り、早く援助をよこせ、という非難と催促だった。

「マルクス、あれは何だ？」

そんな話を半分に聞き、サイファーは畑の中にある、シートに覆われた小山に目が留まる。

「あれは堆肥にする為に、肥料や規格外の野菜を発酵させているのです。有機栽培におきましては、有機肥料を使用するためです」

マルクスの説明を受けながら、サイファーが畑のあぜ道に歩き出す。

「ハーヴァイアンス様、一体何を？」

検討会の男が声を掛けるが、サイファーは何も答えずそこへ向かって歩き出す。マルクスも続き、男たちも、サイファーが何を考えているのか、と不満そうにしながら靴とズボンが汚れないように慎重になりながらついていく。

「……すごい臭いだな」

近くに来たサイファーが思わず手で鼻を覆い隠す。元々から畑に足を踏み込んだ時点から肥料臭さが多少漂っていた。だが、それはあくまで有機栽培にはありふれたことと、サイファーは気にしていなかったようだが、近くに来ると、その強烈な臭いに表情が渋っていた。

「メタンガスが発生しているようですから、あまり長くここにいると体調にきたします、サイファー様」

分かっていると言うように手を小さく上げるサイファーが、後ろから鼻を押さえてくる検討会に振り返る。

「畑にこれを散布するのか？」

「ええ、有機農法では、化学肥料を使いませんので、安全性を強調できるのです」

この匂いはなれないと仕方が無いですが、食の安全のためだ、と男たちは言う。しかしサイファーは、この臭いと、それにたかるハエなどを見て、安全と言う言葉に疑問を持っているようだった。

「マルクス、例のものは用意してあるのか？」

「はい。すでに手配しました。ですが、あれはこの農法にとっては……」

マルクスに耳打つサイファーに、渋る返答のマルクスだが、サイファーはそれで良いと戻る。

「本当に美味い野菜を、こいつらは知らないんだ」

その一言を残し、全員が元の場所へ戻る。

「なぁ、ライコネンさん。本当に援助金は踏んだくれるのか？」

「なぁに、心配することは無い。コレだけの現状を見せれば、手はこちらにある。相手はまだまだ青臭い子供だ。俺たちの経験には及びはしないわけだ。まぁ見ていろ。ここまで追い込んだ意味を教えてやらねば、ハーヴァイアンスのカブを落とせないからな」

そんな会話が背中で囁かれていることに、サイファーは気にすることが無かった。

「マルクス」

「はい」
時折あぜ道の歩きにくさに体を揺らしながらサイファーが呼ぶ。靴に若干の土がついているが、そんな汚れすらサイファーは気にすることなく歩き、すぐ後ろを来るマルクスの視線は、その汚れを時折見つめるように下がる。
「奴らが何故農夫とあれほど違うのか、理由を探れ」
「かしこまりました。では、サイファー様のおそばにはトリノを置いておきます」
サイファーの隣を颯爽と追い越し、入れ替わりにトリノがサイファーを待つ。
「サイファー様、お靴に汚れが」
いつ気づいたのか、はたまたマルクスから指導があったのか、戻ってくるなりトリノは身を屈め、サイファーの靴を手際よく磨き上げた。
「別に気にしない」
「いえ、当主たるサイファー様には、いつ如何なる時も整えられていなければなりません」
「固いのも困ったものだな」
トリノの譲らない主張に、サイファーが初めて、小さな笑みを見せた。
「サイファー様、次は畑の作物をご覧いただきましょうかね」
そんなひと時を破るように、男たちが農夫を呼ぶ。慌てて農夫が作物を用意しようとするのを、サイファーが不意に止める。
「待て。実際に僕に収穫させろ」
「は？　サイファー様、何を仰いまする？　そんなことをしては、汚れてしまいますぞ？」
「構わん。この手でガルファージの実りを実感したいんだ」
唐突な申し出に、検討会の面々が顔をそろえる。
「ではサイファー様、履物だけでもお替えしましょう」
「あるのか？」

「はい。あらゆる事態に対応するのが、私たちの仕事ですから」
少々お待ちくださいと、トリノが車に戻り、トランクを漁る。
「宜しいのですか、サイファー様？」
サイファーの付き人がいなくなると、検討会の面々がサイファーを取り囲むように集まる。それは少々大人の威圧感があるようだが、サイファーは気にすることなく、むしろそれに対抗するように、強い視線を向けていた。
「ここは有機栽培畑です。むやみに土いじりとすると、その手が荒れますぞ？」
「止めておいたほうが宜しいかと思いますよ。農業には貴方のような伯爵家の身分の方が手を汚す必要がありませんよ？」
「それを決めるのはお前たちじゃない」
大人の意見を一蹴すると、雰囲気が少々悪くなるが、それを見越したようにトリノが戻ってくる。
「サイファー様、ご用意できました。こちらに足をおのせ下さい」
大人たちに囲まれたサイファーを救出するようにトリノが大人たちを割って、堂々とサイファーの前に跪き、片足を抜いだサイファーの足を自分の太ももに乗せ、靴を履き替えさせる。
「服が汚れるだろ。そんなことをしなくて良い」
「いいえ。これも私の仕事です」
サイファーがトリノを気にかけるが、トリノに一蹴され、諦めたように任せていた。履き替えた靴は、革靴ではなく、汚れても良いようにと動きやすい靴で、履き替えたサイファーは畑に歩き出す。それについていこうとする大人たちだが、トリノがサイファーの後ろにつき、一定の距離を確保する壁となっていた。
「農夫、お前の畑はどれだ？」
「は、はい。私の畑はこちらでございます」
先導する農夫が案内する畑。そこは決して手入れの行き届いたものとはいえないほどに、所々の作物が枯れ、雑草も生えている。
「作物に活気がないな」

率直な感想は事実であり、作物の葉は、元気良くぴんとした張りは無く、しおれている。
「取水制限があり、肥料も満足に行き届くことが出来ないんですわ」
「農協だけでは賄えないのが現状でしてね。ぜひともハーヴァイアンス家の支援に期待したいところなんですがね」
この現状を見て、男たちは媚を売るようにへらへらと笑う。
「これはジャガイモか」
そんな声にも耳を貸さず、畑に踏み込むと、サイファーの足は柔らかい土に体が沈む。
「はい。今はジャガイモくらいしかまともに栽培が出来ないんです。トマトもご覧の通りの有様でして……」
まともにと言う割には、サイファーが触れるジャガイモの葉は、やはりしなびている。
「一株掘っても良いのか？」
「は、はぁ、どうぞ」
検討会の男たちは何をする気だ？　とサイファーを見るだけで、あぜ道に立ち、畑に入ろうとすらしない。トリノはサイファーのすぐそばでそれを見守る。
「土が随分乾燥しているな。それに……実りも小さいな」
サイファーが身を屈め、力を入れて引き抜くが、想像以上に軽く抜けてしまった。土がパラパラとおち、小さな砂煙が立つほどに土は乾き、その実りは、想像以上に小さなものだった。
「これは規格外だな」
「全くです。今のガルファージはなかなか規格に合う商品が出来ないのですわ」
男たちが声を掛けてくるが、近寄っては来ない。農夫は何も言えないようで、もの悲しげにサイファーの持つジャガイモを見つめていた。
「……」
サイファーは何かを考えるようにその手を見つめる。

「トリノ」
そして、何かに気づいたようにサイファーが振り返る。
「このサイズは食べられるものだったな？」
「はい、サイズは小ぶりですが、この大きさでしたらスープなどに、当家でもお出ししております」
農夫はこれでは売り物にならないと、検討会の男たちと同じようにため息を漏らしているが、トリノは、これは食べるには問題ないと一言で、そんな意見を切り捨てる。
「価格はどうだ？」
「販売されているものとしては、ほとんど出回ってはおりません。当家においては、マリエッタが主体となり自家栽培として栽培しておりますので、大きさに関係なくサイファー様のお口に届くものへと調理しております」
販売するには価値が出ない。だが、食べられる。
「おい、お前たち」
サイファーが検討会に声をかける。
「これはどうするんだ？」
「それはもう商品価値がないので、堆肥、もしくは、農夫たちの食料となるだけです」
「その程度の品質では市民に食べさせるわけにはいきませんので」
「それよりもハーヴァイアンス様。そろそろこの状況への援助金についての検討のほどを致したいと思いますゆえ、そろそろ我々が用意した場所へと……」
男たちが臭いもあってか、そろそろ援助金の話をしたいと本題を持ち出すが、サイファーが呆れたように声を上げた。
「お前たちは金のことしか頭にないのか？　この現状を見て金さえあれば全てが変わるとでも思っているのか？」
いい加減に耳ざとかったようで、その直球に男たちは子供であるサイファーに呑まれていた。
「自分たちの腹は無駄に肥やし、農夫にはまともな支援もない。よ

くその体で言えるものだな、このハーヴァイアンスに向かって」
その口調は怒号ではない。淡々とした冷酷な口調。農夫はすっかり萎縮してしまっていた。
「談合など必要ない。ガルファージへは緊急援助資金を供給はしない」
「なっ……！」
一応にして広がる同様。資金援助をしないと言われ、検討会の男たちが言葉を失う。
「変わりに、ガルファージにはハーヴァイアンスから物資の支給と農業改革を行う為に、農業地域、アルトバースから派遣団を要請し、根本的改革を行うこととする。お前たちには、これ以上私腹を肥やす金の流れは作らない」
サイファーが農夫を見る。その強い視線に一瞬怯むが、サイファーは声色をもどした。
「農夫。お前が苦労しているのは見ていて分かる。恐らく他の農家も現状は変わりがないんだろう。無駄な資金の考え先よりも、今は一刻も早い土壌の改善と現状を最大限に利用できるこの地で新しい農業を開かせてやる」
「あ、ありがとうございますっ」
農夫にしてみれば、農協と同じく資金があれば良いことではあろうが、この現状において、資金だけ与えられた所で大々的な変化は望めない。ならば、改善できる仕事を手助けされたほうがすぐに生産を開始することが出来る。農夫が選ぶのはやはり後者なのかもしれない。
その言葉に、男たちは表情を濁し、唇を噛んでいた。
「お待ち下さい、ハーヴァイアンス様」
そして男が一人切り込んでくる。サイファーの鋭い視線に、一瞬怯みを見せるが咳払いでごまかした。
「失礼を承知で申させて頂きますが、我々農協は、国内の農業を取り仕切るが職務であります。それゆえ、一地方のみに伯爵家より直

接の農業改革と言うものは、いささか他地域との競合にフリが生じる問うものではありませんかな？」
　サイファーがその言葉に詳しく話せ、と視線を向けると、男たちが途端にその男の言葉に肯いた。
「我々が行う農業は、伯爵家ならびに王宮よりの資金的援助においてはその意向を取り入れ、経営努力へ繋げます。しかし、それはあくまでも援助であり、支援者の直接の指導によるものではありません」
「そうでありまするぞ。我々がこの道を行く、言わばプロフェッショナル。伯爵家といえど、我々が育んだ技術、能力には劣りましょうぞ。ならばこそ、援助を行い、我々の改善をご覧頂きたく思いまするぞ」
　表情を一変し、サイファーを見る男たち。
「サイファー様、どうやら伯爵家だけではなく、この国内を取り仕切る以上、農協と言う組織として動かなければならないようです」
　サイファーに耳打つトリノの声に、サイファーは小さく鼻を鳴らした。
「下らん。お前たちにはもとよりガルファージ農耕地域として、特別に支援はしてきたはずだ。それをもってしても生産が落ちるのは、どこに責任がある？」
　支援をしてこなかったわけではない。伯爵領地として、ハーヴァイアンス家が支援してきた中での、この不作。それを改善するには十分な支援をしてきたはずだ、とサイファーの視線は鋭く男たちを射抜く。
「ハーヴァイアンスより農協への支援金につきましては、年生産高の二十％を当家にて購入し、その倍価の支援を開墾当時より行っております」
　トリノもサイファーに加勢すると、立ち上がった氾濫の煙がたちまち行く手を失う。
「し、しかしっ、何の知識もないハーヴァイアンス家直々であらば、

これ以上の不作に陥った場合に、どのように責任をとられるおつもりですか？」
「そうですぞ。我々ならば、国土に誇る農業地位を生かし、不作であろうと、他地域より流通を滞らせることなく市場を安定させることが出来るのですぞ」
それでも食いついてくる男たちに、トリノは失望したように視線を逸らし、サイファーも相手に不快感を与えるようなため息を盛大に吐いた。
「誰がこの地を貸し与えていると思っている？　誰がこの地で開墾することを認め、今日までその内容に口を出さずにいたと思っている？」
サイファーの軽い怒号が男たちを大蛇のように飲み込む。
「お前たちは我がハーヴァイアンス家が農業の素人だと思っているようだがな、勘違いも甚だしいぞ」
一蹴する言葉に、返る言葉は無い。男たちは完全にサイファーに押されてしまっていた。
「サイファー様、あちらを」
言葉を続けようとしたサイファーに、トリノが何かに気づいたように囁き、サイファーがトリノの視線を追う。すると、農道に目立つ黒い人影がよたよたと動いている。
「はぁ……はぁ、ひぃ……ひぃ……ふぅ……」
それは、マリエッタだった。はしたなくスカートを捲り上げ、素足を晒し、表情に女らしさはなく、疲労した表情で全身を使い呼吸をしていた。
「なんて顔してるんだ、あの馬鹿は」
「ですが、予定より随分と早いようですね」
二人の会話に、男たちがその視線を追う。
「あれは……？」
「随分とはしたないメイドですな」
「ウチのだ」

え？　と、醜いと顔をしかめる男たちにサイファーが突き刺すように言うと、驚きに視線が戻る。
「ちょうど良い」
だが、サイファーはマリエッタが現れたのがちょうど良いタイミングだと小さく笑うと、男たちからマリエッタに姿勢を向ける。
「マリー！　さっさと来い」
疲弊していたマリエッタが、どこかぼんやりとした表情で声に気づき顔を動かす。
「あっ！　さ、サイファー……様ぁっ！」
サイファーに気づいたマリエッタの表情がパァァと明るくなる。だが、疲れに動きにはさほど変化はなく、のろのろと向かってくる。
「あれがハーヴァイアンスのメイド、なのか……？」
「何があったと言うんだか、随分とだらしのないメイドですな」
「こちらにも事情と言うものがあります。あなた方の私見にてのご判断はご遠慮願いたく思います」
サイファーがマリエッタに注目している間に、男たちがマリエッタに呆れているのを聞いて、擁護するようにトリノが口を慎ませる。マリエッタとの相性が悪いというのに、他人にマリエッタを非難されるのは、トリノの理に反するようで、背中からかけられるその言葉に、振り返る男たちは、言葉を発せ無かった。トリノの視線も決して穏やかではなかったからだ。
「遅いっ！　後五秒で来なければ帰りも走らせるぞっ」
「ひ、ひぃ～んっ！　そんなっ……悪魔ですかぁ～……」
サイファーの叱責に、マリエッタの情けない声が緩やかに風に乗る。
「そんなに走るのが好きか、お前は？　良いんだぞ、別に？」
愚痴も出したくなるマリエッタではあるが、サイファーはそんな事情を酌むほど優しくはなかった。
「い、いいいやですぅ～、い、行きますっ！　行きますよぉ～」
全身で呼吸をしながら愛らしい表情をどこかへ落としてしまった

ような必死の形相でマリエッタがサイファーの元へやってきた。

第三話．サイファーの視察（後書き）

閲覧ありがとうございました。

次回は、少し農業の話になりそうです（＾＾；

では、次回更新予定作ですが、次回更新予定作は「三世界戦争」です。

更新予定日は、５月２０日以降になりそうです。

毎度遅い更新で申し訳ありませんが、仕事を優先しておりますので、ご了承くださいませ。

また、お詫びに連載していたドレスコードロックオン、ですが、これから連載を継続していくことにしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2966f/

マリーとサイファー　～彼女が主人に目覚めたら～

2010年10月11日03時53分発行